

レトリック発祥の地の輝き

——紀元前5世紀の南シチリアにおける僭主政とオリンピック——

玉 田 敦 子 *

はじめに

レトリックはその起源を古代シチリアの都市国家、シラクーサにたどることができる。紀元前5世紀に生まれた「説得の技術」に「レトリック」と名前を付けたのは、プラトンとされており、現存の文書の中で「レトリケ (ῥητορικὴ)」あるいは「テクネ・レトリケ」いう用語の使用例としてもっとも古いのは、紀元前4世紀に書かれた『ゴルギアス』である⁽¹⁾。日本語ではレトリックは修辞学と訳されることが多いが、古代ギリシアで最初に生まれたレトリックは口頭弁論の技術、すなわち日本語でいうところの弁論術であった⁽²⁾。

しかし、この、レトリックは当時のギリシア世界の中心、すなわちプラトンをはじめとする数多の哲学者が活躍したアテネで生まれたわけではない。この点についてロラン・バルトは、『旧修辞学』の冒頭において、シチリア島南東部のポリス、シラクーサにおいてレトリックが誕生した経緯について以下のように記している。

紀元前485年頃、シチリア島の2人の僭主、ゲロンとヒエロンが、シラクーサに人を住まわせ、賃金労働者を分配するために、追放や住民の移転や土地の収用を行なった。彼らが民主主義的な蜂起によって打倒され、人々が ante quo [以前の状態] に戻ろうとしたとき、無数の訴訟が起った。なぜなら、所有権があいまいだったからである。これらの訴訟は新しいタイプのものであった。民衆の中から多数の陪審員が動員されたので、彼らの前で相手を論破するためには、《雄弁》である必要があった。このような雄弁は、同時に民主主義 (démocratie) と衆愚政治 (démagogie) の性格を帯びていた⁽³⁾。

*人文学部教授—近代フランス文学

本研究は2016－2018年度科学研究費補助金「18世紀フランスにおけるミソジニー（女性嫌悪）とナショナリズム（16K02551）」による助成を受けておこなわれた。

バルトによれば、紀元前5世紀のシチリアにおいてレトリックが生まれた最大の契機は、僭主制の崩壊と民主政の成立である。民衆たちは、僭主を追放し、それまで代々の僭主が不当に篡奪していた土地の所有権を奪い返すことに成功した。ところが、私的所有権を奪還した民衆たちは、土地所有権をめぐる争いを始め、法廷における訴訟を繰り返すことになった。しかし、当時は、弁護士という職業がまだ存在しなかったため、訴訟を起こした本人は、自分の土地所有権について、法廷で論じる必要があった。訴訟がおこなわれた市民法廷においては「民衆の中から多数の陪審員が動員された」ため、法廷に立って弁論をなす者は、地道に論拠を積み上げるだけでは十分でなく、陪審員の心を動かす技術が求められることになったわけである。

レトリックの発祥の契機を紀元前5世紀のシラクーサにおける民主政の成立に位置づける議論は、その後のレトリックの理論書においても散見される。たとえば1980年代から90年代にかけてフランスで、『レトリック入門』や『レトリック』といったレトリックに関する教育書を刊行し、古代レトリックの歴史と体系に関する知見を広めた教育学者、オリヴィエ・ルブールはクセジュ文庫、『レトリック』において、レトリックの起源について、上記のバルトの記述を参照しながら以下のように記している。

ロラン・バルトは、レトリックは「土地の所有権争いから生まれた」と述べているが、自由から生まれた、ともいえるのではないだろうか。というのも、紀元前5世紀、ギリシアの植民地であったシチリアで、僭主たちが失墜したあと、土地を横領されていた人たちが、追放されていた人たちが〔自由を回復し〕自分の土地を取り戻そうとして無数の訴訟を起こしたのだが、その際、市民法廷を説得するための話し方を会得しなければならなかったからだ。そこでコラクスという人物とその弟子のティシアスが、言論によって人を説得させる技術を教え始めた⁽⁴⁾。

ルブールによれば、レトリックは、僭主たちの一時的な追放を契機に、民衆たちが土地を取り戻したことから発展した技術であった。このためレトリックの成立の母胎となったのは、何より民主政のもとで芽生えた「自由」にほかならないというわけである。

このようにバルトもルブールも、紀元前5世紀のシチリアのポリス（都市国家）であるシラクーサでレトリックが誕生した契機を僭主制の破綻と民主政の成立としている。しかし、民主主義の勝利が土地所有権の篡奪者たる僭主から民衆に所有権を奪回させ、民衆に「自由」を与えたことがレトリック誕生における最大の要因と断言するのは、議論としていささか性急過ぎるのではないだろうか。たしかにシラクーサで465年に民主政が成立して、私的所有権に関する訴訟を起こす必要が生じたことは、レトリック誕生の大きなきっかけになった。けれども、バルトもルブールも、当時のシチリアにおいて成立した民主政があくまでも一時的なものに過ぎなかったこと、さらにギリシア世界においてシチリアが僭主制の下で、非常

に長い期間、文化的、経済的に、そして軍事的にも特権的な位置を占めていたことについては言及していない。シラクサーでは467年頃、僭主トラスポユロスが追放された後、民主政が成立するが、実際、この民主政が継続したのは405年までのわずか60年ほどのことであり、紀元前5世紀末には再び僭主ディオニュソス1世による支配が始まることになる。さらにギリシア本土のアテネには、シラクサーよりも前に既に民主政が成立し、繁栄を極めていたことを考えると、なぜレトリック発祥の地がシラクサーだったのかという問いは、やはり一考に値するのではないだろうか？

レトリックの誕生の背景について、バルトとルブールは僭主政から民主政への転換という政体の変化に焦点を絞って論じているが、少なくともこのときシラクサーで民主政が存立した時期の短さとアテネにおける安定した民主政治の存続を鑑みれば、レトリックが生まれたのが紀元前5世紀のシチリアであった必然性に対する説明は、民主政治と自由の成立だけでは十分ではない。バルトは『旧修辞学』において、古代シチリアにおけるレトリックの成立過程を記した冒頭の章に「レトリックと所有権」という示唆的なタイトルを付け、言語と「所有」の問題にも言及しているが、古代シチリアにおける所有権や財、とりわけ当時のシチリア島が享受していた圧倒的な経済的繁栄と文化的栄華については全く触れていない。

一方、ルブールが『レトリック』と『レトリック入門』において、自らのレトリック論の歴史的記述に関する典拠の一つとして挙げている、ポワティエ大学の古典ギリシア学の教授、アンテルム＝エドゥアール・シェニエ（1819—1901）は、『レトリックとその歴史』（1888年刊行）の冒頭において、シラクサーなど、シチリアの僭主が築いたポリス（都市国家）がギリシア世界において文化的な繁栄を誇っていたことを鋭く指摘している。とはいえシェニエもまた当時のシチリアが商業における成功と軍事力を背景に、ギリシア世界を圧倒する形で、あらゆる面での覇権を握っていた点を詳しく論じているわけではない⁽⁵⁾。

他方、紀元前5世紀のシチリアについては、トゥキュディデスの『戦史』やヘロドトスの『歴史』、シチリアのディオロドスの『歴史叢書』といった、神話と伝説が入り交じった記述しか残されていないが、ジャン・ユレやモーゼズ・フィンリー、ジョルジュ・ヴァレといった古代地中海世界に関する専門家が、考古学的調査や上記の文献における記述を総合する形で研究をまとめている。これらの文献をたどっていくと、レトリックが世界の他のどこでもなく、この土地において生まれた様々な理由が垣間見える。たしかにアルカイック期のギリシア世界における政治的な中心はあくまでもアテネであり、シチリアの僭主たちが築いたポリスはギリシア本土から海を渡った島に位置する「新興勢力」に過ぎない。しかし、そこには従来の文化的なヒエラルキーにおいては明らかに辺境に位置する国が、戦略的な方法で文化的覇権を掌握し、言語文化における飛躍的な発展を経て、その中心となる過程が見られる。本稿においては、こうした研究に基づき、紀元前5世紀のシチリアがレトリック発祥の地としてふさわしい、当時のヨーロッパ世界において特別な輝きをもつ場であったことを検討していく⁽⁶⁾。

ところで筆者はこれまで、17世紀から18世紀のフランスにおいて、ホメロスやウェルギリウスを中心とした古典古代の文芸が、近代においてフランス語が到達すべき模範として利用されてきたことについて研究してきた。しかし、フランスにおいてルネサンス期の人文主義以降に流行した古代ギリシアの文献研究においても、シチリアの文化的重要性は完全に看過されている。このためアンシャン・レジームのフランスと古代シチリアをつなぐ糸は文献学上は存在しない。とはいえ、古代シチリアの都市国家でおこなわれた、君主の栄光を讃え、輝かしい文化的モニュメントを築いていくという行為は、17世紀から18世紀におけるフランスの君主政とその「メディア・文化政策」を彷彿とさせる。フランスは通史的に見れば、古代ギリシア、ローマにおいて培われた知的資産を過去数百年において発展させたヨーロッパの辺境の一国に過ぎない。けれども、絶対王政期、とりわけルイ14世期以降のフランスは、アカデミー・フランセーズを中心とした国家戦略において、自国の文学作品は古典古代の文芸に比肩する価値をもつという思想に基づいた文化政策を進め、約3世紀にわたり、フランス中心の新たな文化をヨーロッパに築き上げた。アンシャン・レジーム期のフランスは、ルイ14世期の文学作品を卓越した文化的モニュメントとして祀り上げることによって、近代ヨーロッパにおいて圧倒的な文化的覇者となったのである。具体的には、17世紀に国家機関として設立されたアカデミー・フランセーズが、卓越した文芸作品を生み出したフランス語は、同時代のイタリア語や英語だけでなく、ラテン語やギリシア語よりも優越しているとする事で、最終的にフランス語をヨーロッパ全土における共通語にした。これに対して、古代南シチリアの僭主たちによる治世は約50年で終焉を迎えたため、その傲然たるパワーについてはこれまで注目されてこなかった。とはいえ、17世紀以降のフランスのナショナリティックな文化政策の強引さを考える際に、ギリシア本土から遠く離れたシラクサにおいて僭主たちが築き上げた栄華と「メディア戦略」を参照することは有用ではないだろうか。

本稿においては、まず、シラクサという都市国家が「大ギリシア (Great Greece)」と呼ばれる当時のギリシア世界において突出して重要な地位にあったことを考察し、レトリック成立の地理的・歴史的背景について明らかにしていく。その上で、シチリアの僭主たちが当時のギリシア世界に築いた比類なき栄光、そして僭主たちによる権力の正当化と「メディア戦略」について、オリュンピアをはじめとする祝祭競技とピンダロスの祝勝歌を手がかりとして考察する。また最終章においては僭主制が破綻したシラクサにおいて成立したレトリックが、僭主制時代の栄華とその裏面を如何に背負っているかについて検討する。

1. ギリシア・アルカイック期におけるシチリア

ギリシア文化に関する一般的な時代区分に従うとすれば、紀元前のギリシアはアルカイック期、クラシック期、ヘレニズム期という三つの時代に分けられる。まず、紀元前800年か

ら480年のサラミスの海戦までがアルカイック期とされている。アルカイック期からクラシック期の転換点となるサラミスの海戦では、ギリシアの連合軍がペルシアに勝利を収めたことが知られている。このことによって、ギリシア文化圏はペルシアに替わって地中海世界を支配するようになり、アテネがギリシア世界の軍事同盟の盟主となる。その後、クラシック期においては、政治家ペリクレスが政治の実権を掌握したことによってアテネは黄金時代を迎える。ヘレニズム期と呼ばれるのは、紀元前323年におけるアレキサンダー大王の大遠征以降の時代であるが、この時期には、小アジア（現在のトルコ、メソポタミア河沿岸の国々）の東方諸国にもギリシア文化が移入し、東方の国々がギリシア化されていった。

ここでは、まず、アルカイック期におけるシチリアの歴史を確認しておこう。シチリアとイタリアのカラブリア半島は、メッシーナ海峡を挟んで近接しており、最短部の距離はわずか3キロに過ぎない。さらに島の南岸からアフリカまでも160キロほどである。地中海全体を俯瞰してみると、シチリア島は、南北においてナポリとカルタゴを結ぶ航路の経由地であり、東西においてはジブラルタルとアレクサンドリアの中間地点であった。つまり地中海は、ヨーロッパ、アジア、アフリカという三つの大陸で構成されていると考えられていた当時の世界において、三つの大陸を結ぶ「交通網」であったが、シチリアはその地中海における臍の位置を占め、最大の交通の要所となりうる特権的な地理的条件を備えていたわけである。

地質学的な調査によれば、シチリアがイタリアやアフリカ大陸と陸続きであったことはなく、旧石器時代に最初に移り住んだ人々も海からやってきたことが明らかになっている。また考古学的調査からは、シチリアが旧石器時代から、他の地中海沿岸の地域と文化的な交流をもち、その後は交易の中心となると同時に、数々の戦争の戦場となったことがわかっている。シチリアは土地が肥沃であったことから、古くからフェニキア、ギリシア、カルタゴ、ローマから連れてこられた奴隷たちが開墾した農地が広がっており、小麦を中心とした農業によって地中海有数の穀倉地帯として栄えていた。古代のシチリアへの入植は、基点となる国に従属した「植民地」に移り住むのではなく、たとえば16世紀から18世紀にかけての北アメリカへの移民、あるいは19世紀のオーストラリアへの移民と同様に全く新しい土地で完全に独立した生活を営むものであった。つまりシチリアはギリシアの本土にも他の強国にも決して政治的には従属することはなく、完全に独立した統治のもとにあったのである⁽⁷⁾。

シチリアには紀元前8世紀中頃より、ギリシア本土から渡来したギリシア人が移住を始め、「農地開発」のコロニーを作っていた。ギリシア人の本土の外へ移住を可能にしたのは、地中海におけるフェニキア人の地位の相対的な低下と、航海術の進歩であったが、植民者たちが移住をおこなった直接の契機は経済的な事情であった。当時のギリシアで土地所有権を独占し、民衆を支配した特権的な貴族たちは、長子相続の伝統を守っていたため、野心的な次男や三男が新地開拓を目指して海を渡り、植民活動を牽引することになったのである。このようにギリシア人植民地は、西はマルセイユから東は黒海沿岸まで極めて広範囲に拡がり、数百ともいわれる都市国家（ポリス）が形成されることになった⁽⁸⁾。

シチリア島に最初に移住をしたギリシア人は、エーゲ海に浮かぶエウボイア島のカルキスからきて紀元前757年にナクソスに定着したイオニア人であった。カルキス人たちはその後、島の東部に広がるカターニア平野にカターニアとレオンティノイという都市を築いた。この二つの都市は農業に適した肥沃な平野に位置していたため、農業生産によって非常に栄えることになった⁽⁹⁾。

シチリアの都市国家においては、ギリシア本土の他の都市と同じように街の中心にはアゴラと呼ばれる集会場や神殿、他の公共施設が設けられ、街の外部には墓地が作られることになった。古代ギリシアの都市国家の人口の動向に関しては、一般に、墓地に関する考古学的調査が有益とされているが、古代シチリアの都市国家の墓地に関する調査によれば、個々のポリスにおいて人口は自然増だけでは説明できない程度に増加しており、ギリシア人植民が始まって以来、恒常的にギリシア本土から人口が流入していたと考えられている。

ギリシア・アルカイック期において、シチリアが主に交易の対象としていたのは、手描きの壺である。ギリシアからの植民が始まって以来、約百年の間、シチリアにおける主な輸入品はコリントス製の陶器であった。ギリシア本土からシチリアへの植民が始まった当初は、アテネはシチリアに移民を出していなかったことから、アテネはシチリアとのつながりが薄かった。しかしながら紀元前550年以降になると、アテネはコリントス製の陶器よりも圧倒的に質の高い陶器をシチリアに送り込み、陶器市場を数年のうちに独占するようになった。ギリシア世界に広まった手描きの壺には、当時の人々の日常的な生活から、オリュンピア競技をはじめとする祝祭競技まで、具象的でわかりやすい造形で描かれており、当時の情報をそのまま視覚的に伝える貴重な図像資料となっている⁽¹⁰⁾。

なお、陶器を中心としたシチリアの交易は、コリントスを中心とするギリシア本土の船によっておこなわれていた。シラクーサは後に唯一シチリアにおいて戦艦をもつ都市となるが、そのシラクーサでさえ紀元前5世紀まではイオニア海やエーゲ海を渡って商品を運ぶ船をもっていなかった。海運を担っていたのはシチリア島の外の住人たちであり、輸出入にまつわる取引も土地貴族たちが担っていた。そのためシチリアには商業のみを生業とする商人は存在しなかった。最初はコリントス人たちがエーゲ海の島々、小アジアのフォセーのみがおこなっていた海上における交易を独占していたが、後にロードス、エウボイア島における商取引もおこなうようになった。コリントス人たちは、自分たちの製品が陶器市場から淘汰された後も地中海における商業の中核を担い、シチリアにアテネの壺を運び続けていた⁽¹¹⁾。

シチリアは、文化的、また経済的な側面から見て、ギリシア世界においてもっとも優れたものを消費する輸入国であったが、それを可能にしたのは島の豊富な農産物であった。シチリアは北アフリカのカルタゴにワインやオリーブ油を輸出する一方、ギリシアには大量の小麦を輸出していた。さらに毛皮や木材、蜂蜜も産出し、輸出をおこなっていた⁽¹²⁾。

ギリシア人の入植以来、シチリアではギリシア語が使用されていた。シチリアのギリシア語とギリシア本土のギリシア語は、多少の方言の違いをのぞけば、ほとんど同じであった。

宗教に関しては、当初はシチリア土着の信仰がもつ影響も大きかったが、次第にその影は薄れ、神々の名前や祈りの作法なども完全にギリシア的なものとなっていった。シチリアは、ギリシア本土での主要な宗教的祝祭の日には使いを送り、財宝を供えるという習慣も守っていた。また、デルフォイやオリュンピアなどの聖地を目的地とした巡礼も盛んにおこなっていた。シチリア島では大理石が採掘できないにもかかわらず、神殿に数多くの大理石の彫像が残されているのは、経済的な繁栄を背景に大量の彫刻作品が輸入されたためと考えられている⁽¹³⁾。

このようにシチリアは宗教や言語、文化、習俗といった点においては、全くのギリシア植民地であった反面、政治的・軍事的にはギリシア本土から完全に独立していた。たとえばギリシア本土のポリス、メガラ・ヒブレアがシチリアにセリヌンテというポリスを設立したとき、メガラからパイロスを招いたという経緯があったが、シチリアの植民地にとってギリシアの権威はつねに象徴的なものに過ぎず、ギリシアが植民地のシチリアに政治的・軍事的介入をするということは一切なかった。また税務上においても、シチリアがギリシアに上納金を納めたという記録はなく、財政面においてもギリシアはシチリアに何の強制力ももたなかった。シチリアがギリシア本土と政治的に深いかかわりをもたなかったことによって、シチリアの都市の住人は様々な土地からの「寄せ集め」になった。そのため都市の住人たちの結束は弱く、また家族や友人同士のつながりも親密とはいえないものであった⁽¹⁴⁾。

アルカイック期初期のシチリアは、ギリシア本土から大量の人口が流入したことで農業が飛躍的に発展し、農産物による収益によって文化的にも経済的にも繁栄していた。本稿の舞台であるシラクーサの場合、最初にコリントス人たちが入植したのは、アルカイック期の中期、紀元前 734 年頃であった。このとき入植を導いたのは、コリントス人の貴族アルキアスとされている。シラクーサは、紀元前 733 年にギリシアのコリントス出身のドーリア人によって建設された。シチリア島におけるギリシア人入植者の多くは十分な資産をもたないギリシアの都市国家の住民たちであった。シチリア島の植民地では、ギリシア本土の都市国家と同様に土地が分割され、長子以外への相続を禁じた厳しい世襲制をとる貴族制度が構築されていた。このシチリアの貴族たちはアテネの特権的貴族^{エウパトリデス}のようにふるまい、土地の所有、祭司たちの管理、法の整備と執行を権力の基盤として国家の支配権を独占した⁽¹⁵⁾。シラクーサにおいても、ギリシア人入植者たちはガモロスと呼ばれる貴族階級を形成し、原住民のシカン人やシクル人を中心とした民衆たちを農奴として働かせていた。

シチリアにおける経済的・文化的繁栄は順調な人口の増加をもたらしたが、それゆえ紀元前 6 世紀になると政治的な紛争も増えていった。島内では民衆を支配し、寡頭制を敷いていた貴族たちと民衆との対立が激しくなっていく一方、貴族どうしの間でも勢力争いが絶えず生じるようになった。さらに、シチリア島では、原住民のシクル人やシカン人、出身の異なるギリシア移民など、ポリスごとに別の民族が住んでいたため、ポリス間における抗争も島内全体を混乱させていた。この混乱に乗じて現れたのが、紀元前 6～5 世紀のシチリアを席

捲する僭主たちであった。

シチリアに最初に僭主が現れたのは、セリヌンテ、ジェラなど島の西部のポリス、紀元前570年から555年のことであった。シチリアにおいては、商業の発展にともなう土地貴族の没落による混乱の中で、アテネよりも早い時期に独裁的権力が台頭し、前7世紀の終わりには僭主たちが独裁政治をおこなうようになった。シチリアの僭主たちは、近隣のポリスを侵略し、虐殺や住人の強制移動によって自分たちの勢力を拡大していった。

よく知られているように、アリストテレスは『政治学』において、「もっとも神的な国制から逸脱したものが、もっとも悪しき国制であるのは当然のことである⁽¹⁶⁾」とした上で、僭主制を「もっとも悪しき国制」と位置づけ、シチリアの僭主をその例として挙げている。アリストテレスによれば、僭主制は以下のように暴力的な支配を特徴とするものである。

被支配者の利益を顧みることなく、ただみずから自身の利益のために、いっさい責任を問われることなく、およそ同等な者はおろか、いっそうすぐれた者をも支配するものである。それゆえ、その支配は被支配者の意志に反する。なぜなら自由人の何人たりとも、このような支配にはすすんで耐えることはしないからである⁽¹⁷⁾。

言うまでもなく、こうした僭主の支配には残虐なイメージが付き物である。たとえば、島の南西に広がる地中海沿岸の中央部、アグリジェントのファラリスは、ゼウス・ポリエウス神殿の建設を指揮し、奴隷たちを武装させて、ある祭日に市民たちを虐殺して権力を掌握した。ファラリスは「青銅の雄牛」と呼ばれる処刑装置をアテナイ人の鋳物師ペリロスに作らせた。この「青銅の雄牛」は内部が空洞になっており、中に人間を入れて、下から火を焚いて雄牛が黄金色になるまで熱するものであった。雄牛の頭部は楽器のような複雑な仕組みになっており、中の人間は牛の雄叫びのような音声を発しながら焚死するといわれていた。ファラリスはペリロスが雄牛を完成させた際、まず製作者であるペリロスに内部に入るように命じ、ペリロスを焼き殺した。そしてファラリス自身、最後に僭主の地位を奪われた際には、雄牛に入れられ焼かれた。ファラリスの暴政は紀元前570年から554年まで16年間続いた⁽¹⁸⁾。その後5世紀にシチリアにおける僭主政は最盛期を迎え、紀元前467年頃にシラクサにおいて革命が起こるまでの時期が、シチリアの黄金時代を形成した第一次僭主制期となった⁽¹⁹⁾。

紀元前6世紀以降のシチリアは、文化レベルにおいても、ギリシア世界において群を抜いていた。たとえばその頃栄えていたポリス、ヒメラにはステシコロスという抒情詩人が現れた。ステシコロスは現代においては、古代ギリシアを彩った数多くの詩人の一人として名をとどめているに過ぎないが、同時代においては詩法の三段構成を発明し、コロスをともなう合唱抒情詩を完成させた功績により、全ギリシアにおいて名のとどろく高名な詩人であった。このようにシチリアで生まれたステシコロスが生地にとどまって詩作に従事したこともま

た、シチリアのギリシア世界における文化的優位と重要性を示している。実際、シチリアは、その経済的繁栄から、ギリシア各地から優れた職人や芸術家が庇護者を求めて集まる島になっていった。紀元前 600 年前後にレスボス島からシラクーサに亡命、僭主の庇護のもとで活躍した詩人のサッフォーもその一人であった⁽²⁰⁾。

II. 英雄か、暴君か？—— 紀元前 5 世紀シラクーサの僭主、ゲロンとヒエロン

シチリアは、ギリシア人の植民が始まって以来、最初の 200 年ほどの間は、農業を主な産業として発展していたが、その後、南はカルタゴから西はイベリア半島、東はトルコまで広がるギリシア圏において、徐々に海運が発達するにつれ、地中海における重要な商業拠点になった。紀元前 505 年に、シチリア島の南岸に位置する都市国家ジェラにおいて最初の僭主となったクレアンドロスが殺された後、弟のヒッポクラテスはその地位を継承した。ジェラの僭主となったヒッポクラテスは、紀元前 5 世紀の初頭に、ジェラの東に位置するシラクーサを侵略した。ヒッポクラテスがシラクーサを略取したいと考えたのは、なだらかな海岸線が広がるジェラには港がなかったのに対して、シラクーサは港湾都市として地政学的に恵まれていたからである。

当時、シラクーサはガモロスによる寡頭政に支配されていたため、ヒッポクラテスは、まず民衆や農奴をガモロスから解放し、歓心を得ようとした。しかしながら、その際、ギリシア本土のコリントスの介入をたのんだことが民衆の不興を買ったため、この作戦は失敗し、ヒッポクラテスはシラクーサを手に入れることができなかった⁽²¹⁾。ヒッポクラテスが亡くなった後は、その配下で騎兵隊長であったゲロンがヒッポクラテスの息子たちの庇護者となった。ところがゲロンはジェラにおける統治体制を確固としたものにするやいなや、すぐにヒッポクラテスの息子たちから権力を奪い、アグリジェントの僭主、テロンと複雑な婚姻関係を結んで、姻戚となって手を組むことに成功する⁽²²⁾。

この時代において、シチリアの支配階層である土地貴族、ガモロスは、商業取引にも多少携わっていたが、実際にギリシア本土や他の地中海の地域との海運業に携わることはなかった。このため、その権勢には少しずつ翳りが見られるようになった。民衆はこれを好機と見て、ガモロスによる寡頭政治に対して蜂起をおこなった。ガモロスたちはシチリア島、南部山岳地帯の中央部に位置するコロニー、カスメナイに避難して、近隣のポリス、ジェラの僭主、ゲロンの助けを求めた。ゲロンは、長年、ヒッポクラテスが手に入れそびれたポリス、シラクーサを狙っていたため、ガモロスを助け、農地を開発すると同時に自身の支配力を強めた。その後、紀元前 466 年に僭主トラスポユロスが追放されるまでの数十年間、シラクーサはこの上ない繁栄を誇り、全盛期を迎えることになる。ゲロンはジェラの統治を弟のヒエロンに委譲し、自らは紀元前 485 年にシラクーサを占領し、宮殿をジェラから移して、紀元

前 478 年まで僭主として君臨することになった⁽²³⁾。

古代ギリシアの歴史家ヘロドトスが紀元前 5 世紀に書いた『歴史』において述べるところによれば、シラクサはゲロンが奪取するやいなや、瞬く間に大いに栄え、拡大していった。ヘロドトスは僭主ゲロンによるシチリア島南東部における勢力拡大について以下のように記している。ジェラの南東にはもともとシラクサからの植民によって築かれたカマリナという都市国家があった。ゲロンはこのカマリナを破壊し、カマリナ人をシラクサに移住させた。しかしこのときゲロンはカマリナ人たちを奴隷として迎えずに、彼らに市民の地位を与えた。さらにジェラの住民の半数をシラクサに移住させ、同じように市民の身分を与えた。

また、ゲロンは都市国家メガラも包囲し、住民たちを降伏させた。メガラの民衆たちは市民権を付与されず、奴隷としてシチリア島の外に売られていったが、他方、このときゲロンに対して抗戦を試みたメガラの支配者たちは、市民としてシラクサに迎えられた⁽²⁴⁾。これはゲロンが支配階級を優遇する反面、民衆に対しては強い警戒を抱いていたためであった。ゲロンは、エウボイア人の民衆たちも同じように島外に奴隷として売却した。このようにゲロンは、周辺の都市国家の市民を別の都市国家に強制移住させ、再び市民の地位を与えると同時に、土地にもともと住んで耕作などをしていた民衆たちを島外へ奴隷として売却して利益を得て、僭主としての権力を強化していった⁽²⁵⁾。この強制移住や住人の売却は、古代ギリシアにおける「僭主」を特徴づける、過度な権力の行使の例として知られている⁽²⁶⁾。

ゲロンの権力をさらに絶対的にしたのは、紀元前 480 年のヒメラの戦いであった。この戦いにおいて、ゲロンは北アフリカからシチリアに侵攻してきたカルタゴ軍を破り、地中海世界における軍事的ヘゲモニーを確立していくことになる。ゲロンは軍事的才能に恵まれており、ギリシア世界だけでなくヨーロッパ全土における最強の支配者となった⁽²⁷⁾。同時代人でその名を知らぬものはおらず、紀元前 481 年にギリシアにペルシア軍が攻め込んできた際、ギリシアがシチリアのゲロンに援軍を求めたことも記録に残っている⁽²⁸⁾。このようにゲロンが強大な軍事力を支えとして権力を拡大し、ギリシア世界における英雄と見なされるようになった背景には、地中海を挟んだカルタゴからの絶え間ない挑発があった⁽²⁹⁾。ゲロンはカルタゴの脅威を口実に軍備の強化を進め、紀元前 480 年にヒメラを侵攻したカルタゴ軍をわずか一日で破って駆逐したといわれている。

ところが問題は、この「ヒメラの戦い」がペルシア戦争のサラミスの海戦と全く同じ日に開戦されたことであった。サラミスの海戦は、ギリシア戦隊がペルシアに圧倒的な勝利を収め、地中海世界におけるギリシアの覇権獲得を決定づける歴史的転換点であるが、シチリアが北アフリカのカルタゴ軍を破ったのがまさに同じ日だったわけである⁽³⁰⁾。ギリシアはサラミスの海戦を前に再度ゲロンに援軍を求めていたが、このときゲロンはカルタゴの脅威を理由に軍を送ることを断ったのは作戦として正しい判断であった。シチリアのディオドロスは『歴史叢書』において、ヒメラの戦いの後、死闘を何とか生き抜いてカルタゴに帰還したわずかな兵士たちは、シラクサ率いるシチリアの軍事力について、「シチリアを敵に回し

たら、皆殺しにされる」と述べたとしている⁽³¹⁾。さらにヘロドトスの言によれば、ギリシアからの使者はゲロンを「ギリシア世界の重要な一端を占めるシチリア島を支配する」僭主として扱い、ゲロンは「ギリシア全体の軍隊を統率する権限を与えられるのならば、どんな貢献もいとわない」としてギリシアの提案を喜んで受け入れたのであった⁽³²⁾。

こうしてゲロンの支配の下で軍事的な覇権を獲得したシラクーサは、文化面においても大ギリシアにおける中心をなすようになる。紀元前6世紀以来、シチリアの僭主たちは、それぞれのポリスにおいて、重厚な柱とエンタブレチュアによって知られるドーリア式の大神殿など美しい神殿や公共施設を次々と建造していった。中でもよく知られているのは、シラクーサに紀元前565年に建立されたアポロン神殿、アグリジェントのヘラクレス神殿、セリヌンテの神殿である。その後、僭主政治の全盛期である紀元前5世紀には、アグリジェントとセリヌンテで巨大な神殿がさらに建立されていくと同時に、紀元前480年にはシラクーサにアテナ神殿が、アグリジェントにはヘラの神殿、「和合の神殿」が建立された⁽³³⁾。

建造物だけではなく、紀元前550年以降、大量に鑄造されたとされる貨幣もまた当時のシチリアの繁栄と豊かさの指標である。シチリアとギリシアの国々の間でも、小アジアで紀元7世紀に貨幣が作られるようになるまでは、物々交換や鑄塊（インゴット）によって取引がおこなわれていた。ところが、紀元前6世紀にはシチリア島内の都市国家セリヌンテ、ヒメラ、アグリジェント、ザングルで、また紀元前5世紀にはシラクーサとジェラで、島内で豊富に産出された銀による銀貨の鑄造がおこなわれるようになった。

ヒメラの戦いはアグリジェントとシラクーサに、金2700キロ分に相当する略奪品と巨額の賠償金という戦果をもたらしたとされている。シラクーサで美しい金貨が打刻されるようになったことで、商取引がさらに活発になり、小麦や畜産を中心とするシラクーサの産業はさらなる発展を遂げた。このことにより、土地貴族は商業ブルジョワジーを兼ねる支配階級となっていった⁽³⁴⁾。ゲロンは紀元前475年に、シラクーサの北に位置するカターニアとナクソスを攻略し、住民を強制的にレオンティノイに移住させた⁽³⁵⁾。

紀元前478年にゲロンが亡くなった後は、弟のヒエロンがシラクーサを統べる僭主となった。ヒエロンはもう一人の兄弟であったポリザロスをジェラから追放し、自らの権力を確固としたものにした⁽³⁶⁾。ヒエロンはゲロンが住民を駆逐したカターニアにシラクーサ人を移住させて、エトナという名の新しいポリスを建設した。このことによって、ヒエロンによる統治の下、シラクーサはシチリア島全土の三分の一を支配するようになり、最盛期を迎える。ヒエロンの宮廷にはアテナイで名をはせた詩人、シモニデスだけでなく、ケオスのパッキュリデス、そしてテーベのピンダロスらが招かれ、デルフォイやオリュンピアの神殿に頌歌を捧げていた。またアテネ出身の悲劇作家アイスキュロスも長年シチリアに滞在し、紀元前470年にシラクーサで『ペルシア人』を上演した⁽³⁷⁾。ピンダロスとアイスキュロスは、それぞれ、ヒエロンのエトナ建設についても、称賛の詩を作成している⁽³⁸⁾。

しかしながら、紀元前6世紀末期から数十年程続いた僭主制シチリアの黄金時代は長くは

続かなかった。シチリアがギリシア世界の経済的・文化的・軍事的中枢となっても、個々の僭主たちは個人的な争いや衝突を絶えず繰り返し、このことが僭主制度自体をゆるやかに解体に導くことになったからである。ヒエロンの後継者、僭主トラスボユロスは紀元前 466 年に民衆や奴隷による革命によって排斥されることになる。

シチリアの僭主たちは、このように他の都市を破壊し、住民たちを強制連行し、新しい都市を築いていった点において明らかに残虐な暴君であった。アリストテレスは『政治学』において、「僭主制が短命である理由」を記述し、シチリアの僭主たちがなした様々な暴挙を批判するとともに、正当な根拠をもたないまま支配権を掌握した僭主が、自らの権力を維持する方法についても以下のように述べている。「あたかも僭主でなく、管理を委託された者であるかのように、国家を整備し、美しく飾らねばならない。さらに、神々を尊ぶことにかけては、誰にもましていつも熱心であるようにみえなければならない⁽³⁹⁾。」実際、アリストテレスが述べるように、アグリジェントのテロン、シラクーサのゲロンやヒエロンは、シチリア島の経済的な繁栄、オリュンピア競技での勝利、ギリシア本土の聖地への惜しみない献納などによって、自らの権力を顕示することに努め、ギリシア世界において正統な英雄として認められることを目指していた。僭主たちは、伝統や歴史をもたず、ギリシアの神々たちから正当な形で王権を授受することはなかったが、アリストテレスが指摘するように、神々に対しては極めて敬虔であり、神殿の建設や財の奉納に余念がなかった。また、ギリシア世界での権勢を強めるに従い、ファラリスのような凶暴な「暴君」と見なされることに対して抵抗し、自らを英雄として認めさせることに心を砕いていた。しかし僭主たちの権力は近代ヨーロッパにおける王権とは違い、全く根拠のないものであった。僭主たちは対外的には「英雄」としての矜持を保つことに専心していたが、当時シチリアの内部では法的な規制はほとんど機能しておらず、僭主たちは絶対的な権力を行使していた⁽⁴⁰⁾。

ただ、その一方で、ヒッポクラテスからヒエロンまで、シラクーサの黄金時代を築いた僭主たちは、ポリスに圧倒的な経済的繁栄をもたらした。このためこの時期においては、民衆たちもまたポリス内において経済的な豊かさを十分に享受していた。そしてシラクーサにおいては僭主政に一旦終止符が打たれた後も、農業生産と造幣業による飛躍的な発展により、その繁栄は続いた。たとえばアテネは紀元前 508 年に僭主制から解放されて以来、民主政による統治が始まっていたが、この民主政アテネもまた、紀元前 5 世紀にシラクーサとアグリジェントの僭主たちが実現した経済的成功を目指していた⁽⁴¹⁾。

このようにシチリアの僭主たちは、農業生産の成功による蓄財と軍事的成功によって、ギリシア本土と比べて全く遜色ない建造物、貨幣、文学作品を残した。建築家や芸術家、詩人は、僭主たちを作品によって讃えることによってシチリアが築き上げた栄華を確固としたものにすることに貢献したのである。

オリュンピア競技と僭主の躍進

古代ギリシアにおいてはオリュンピア競技のほかに、ピュティア、ネメア、イストミアという三つの祝祭競技が開催されていた。しかし中でもゼウスを祀るオリュンピア競技は、もっとも古く、格別に重要な競技という位置づけであった⁽⁴²⁾。オリュンピア競技が初めて開催されたのが紀元前 776 年であったのに対して、他の競技が始められたのは紀元 6 世紀で、ピュティア競技が紀元前 582 年、イストミア競技が紀元前 581 年、ネメア競技が紀元前 573 年である⁽⁴³⁾。祝祭競技は、それぞれのポリスの威信をかけた一大事となり、優勝者はポリス全体によって讃えられ、勝者を輩出したポリスは祝賀の宴に酔いしれた。またこの祝祭競技は僭主たちが力量を競い、誇示し合う機会でもあった⁽⁴⁴⁾。考古学的調査によれば、紀元前 8 世紀にオリュンピア競技が始められた時点では、オリュンピアにはまだゼウスの神殿のほかに何も建造物がなく、競技場などの施設が作られたのは、紀元前 5 世紀頃であった。その頃になるとオリュンピア競技は全盛期を迎え、競技数も 13 を数えるまでになり、競技場には約 4 万もの見物人が訪れるようになった⁽⁴⁵⁾。

一方、祝祭競技は、個々のポリスが力を競い合うと同時に、ギリシア世界の一体感を支える重要な行事でもあった。先に述べたように、ギリシアは初めてオリュンピア競技が開催されたアルカイック期初期には、まだバルカン半島とトルコの西岸の一部を占める辺境に過ぎず、当時の小ギリシアでは、土地所有権を独占する一部の土地貴族が民衆を支配していた。ところが、当時は農業生産の技術が不十分であったことから、人口を抱えきれないポリスも現れ、人口超過の起こった土地から西方に向かって植民がおこなわれるようになる。その結果として、ギリシア世界は祝祭競技の全盛期となる紀元前 5 世紀頃には、東は黒海、西はマルセイユ、北はイタリアの南部とシチリア、南はキュレネ（リビア）まで大きく拡大し、大ギリシアとして地中海世界で大きな存在感を示すようになった⁽⁴⁶⁾。

祝祭競技は、いずれも 4 年に一度開催されていたが、とりわけオリュンピア競技は、紀元前 776 年以降、その後紀元 261 年までの約千年の間、一度の休みもなく開催された。19 世紀末以降のオリンピック競技が 2 度の世界大戦によって 3 回の大会が休止されたのに対して、古代の祝祭競技はポリス間の度重なる戦争をものともせず、一度も絶えることなく開催されたのである⁽⁴⁷⁾。また、現代のオリンピックが毎回、必ず世界各国の異なる都市で開かれるのに対して、古代の祝祭競技はポリスが神の審判を仰ぐ宗教的な行事であったため、それぞれの競技が聖地と定めた土地で開催されることになっていた。さらに祝祭競技に関しては、開催時期にも聖性があるとされており、たとえばオリュンピア競技は必ず 8 月に聖地オリュンピアで開催されていた⁽⁴⁸⁾。祝祭競技がこのようにどんな状況のもとでも同じ時期に開催されていたのは、祝祭競技が神を讃えると同時に、真に神に選ばれしものを決定するという審判の役割を果たしていたからであった⁽⁴⁹⁾。このことから祝祭競技は各ポリスにとって戦争と同等の、もしくはそれよりも重要な位置を占めていた。

古代ギリシアにおける祝祭競技は現在のオリンピックとは異なり、すべての種目が個人競技であり、団体競技は存在しなかった。また、2位以下の入賞者たちも順位によって讃えられる現在のオリンピックとは違って、祝祭競技においては、唯一、優勝者のみが勝者としての榮譽を受けることができた。近代のオリンピックも、各国のナショナリズムを高揚することによって経済的な効果を狙う政治性の高い行事であるが、祝祭競技は文字通りそれぞれの都市国家の命運をかけたイベントであった。オリュンピア競技においては、勝利は競技者へのみ存するものではなく、ポリス全体による功績と考えられており、僭主政のポリスにおいては、あらゆる競技のスポンサーである僭主自身が、神に選ばれし者としてその榮譽を得るとされていた。

競技の内容に関しては、紀元前728年の第13回大会まで、オリュンピア競技は「一スタディオン（約191メートル）を走る競走」という種目のみであったが、紀元前724年の第14回大会からは「2スタディオンを走る中距離競争」、第15回大会からは約20スタディオン（約4800メートル）を走る長距離競争が併せて実施されるようになる。紀元前708年の第18回大会からは、一人の選手が、短距離競走、幅跳び、円盤投げ、やり投げ、レスリングの5種目に取り組むペントスロン競技が種目に加えられた。紀元前688年の第23回大会からはペントスロン競技の中のレスリングが単独でおこなわれるようになり、紀元前688年からはボクシングも種目として加えられることになった。レスリングもボクシングも時間制限がなく、降参を認めるまで続く過酷な競技であった。さらに紀元前648年の第33回大会から、パンクラティオンという、レスリングとボクシングを組み合わせた格闘技もおこなわれるようになった。一方、紀元前680年の第25回大会からは、48スタディオンを走る4頭立ての戦車競走が始まった。紀元前8世紀に最初のオリュンピア競技が始められたときには競技はスタディオンのみで一日で終了していたのに対して、最盛期といわれる紀元前472年の大会時には5日間にわたって競技がおこなわれた⁽⁵⁰⁾。競技を開催するための資金は、各ポリスが神殿への献金という形で支払う拠出金によって賄われており、勝利を収めた選手に対しては多額の賞金が支払われていた。

古代シチリアがギリシア世界において文化的覇権を形成していく過程においては、オリュンピア競技をはじめとする祝祭競技だけでなく、祝祭競技における勝利を祝うスペクタクルもまた重要な役割を果たしていた。既に述べたようにシチリアの僭主たちは、当時のギリシア世界において経済的、軍事的な覇権を獲得し、思うままに権勢を振るうと同時に、自分たちが暴力的な形で権力を奪取した暴君であるというイメージを払拭し、正統な形でポリスを統べる君主として認知されることを求めている。僭主たちは、その実態の如何によらず、少なくとも対外的には、ポリス内部で民衆を力と恐怖によって支配しているのではなく、君主としての正当な力を保持しているという印象を築き上げることが重要と考えていたからである。しかしシチリアの僭主は、何代にもわたって国家の統治を担う由緒正しい血統の支配者ではないため、共同体の起源や伝統を創造し、統治の正当性を立証するためには並々ならぬ

努力をする必要があった。このためシチリアの僭主たちは、祝祭競技で勝利を取めることによって、ギリシアの神々に対する信仰と神々からの寵愛を証し立てようとした。さらにまた、その栄光について記述する行為であった祝勝歌の制作に並々ならぬ力を注ぎ、自分たちのポリスの優越性を認知させることに心を砕いていた。

その結果、紀元前488年にはゲロンがオリュンピアにおいて、4頭立ての2輪戦車での競争、カドリージュ競技で優勝し、オリュンポスに建立されていたゼウスの神殿に献納をおこなった。また、ヒエロンがオリュンピアの騎馬競技で勝利を取めた476年には、戦車競技においてはアグリジェントのテロンが優勝した。オリュンピアにおける競技においては明らかな序列があり、戦車競技における勝利が最高の荣誉と考えられていた。ヒエロンが、この、もっともステイタスの高い競技である戦車競技で優勝するのは、ようやく紀元前468年になってからのことである⁽⁵¹⁾。競技の人気はその時々によって違ったが、紀元前5世紀、シラクーサでピンダロスがヒエロンの庇護のもと、数多くの讃歌を書いていた時期においては、オリュンピア競技のうち戦車競走が国家事業としてもっとも重要視されていた。このためピンダロスがまとめた祝勝歌集『オリュンピア競技』において、もっとも多く取り上げられているのは戦車競走であった。戦車競争の次に多く取り上げられる種目は、ペントスロンであったが、ペントスロンは、語義通り、5つの競技を競い、3種目以上を制した者が優勝者と認定される競技であったことから、複数の種目で多面的に実力を見せることを狙う貴族や裕福な市民が出場する特権的な種目と見なされていた⁽⁵²⁾。

ピンダロスと祝祭競技のスペクタクル

祝祭競技においては、運動競技にともない、それぞれ勝者とそのポリス、また僭主を讃える祝祭が開催されており、この祝祭はピンダロスなどの詩人が主導する壮麗なスペクタクルであった。祝祭競技において、ギリシアの都市国家の僭主たちは選手を選出するだけでなく、それぞれ詩人たちを招いて勝利の祝祭を開催する準備をしていた。詩人は必ずしも競技を観戦していたわけではなかったが、実際に祝祭競技が開催される聖地に赴いて競技を観戦し、即興で短い詩を詠み、作曲もして、コロスの指揮をすることもあった。一方、詩人の作品として残る長いオードは一般的には選手の祖国における祝祭でスペクタクルの形で上演された。こうしたスペクタクルにおいては、詩人が長大な競技祝勝歌（エピーニキア）を書いて勝者を讃える習いであったが、詩人は現地の熱狂を各ポリスに伝える伝令であり、祝勝歌を書いて、スペクタクルを上演する演出家の役割を果たしていたわけである。

ポリスにおける祝祭のスペクタクルでは、詩人の作った詩を合唱隊が吟じる習いであった。ピンダロスの時代における競技祝勝スペクタクルは、音楽とダンスをともなって上演されていたことが知られているが、ダンスについてはほとんど記録が残っていない。しかしながらスペクタクルにおける舞踊は、詩人が作曲を担っていた音楽とともに、非常に宗教性の高い

ものであり、神々への祈りを捧げるとともに、神々の恩寵を受けた英雄、すなわち競技者とそのパトロンである僭主を讃えるためのものであった。

ピンダロスはボイオティアの首都テーバイ郊外のキュノスケパライ村において貴族の子弟として産まれたとされているが、その生涯に関しては不明な点が多い。生年については、作品の中で、自らの生誕年を紀元前 582 年から開催されるようになったピュティア競技の 17 回目の大会の開催された年であることを記していることから、紀元前 518 年とされている⁽⁵³⁾。ピンダロスは、シチリア最大の都市国家シラクサをゲロンとヒエロンが統治していた時代にシラクサの宮廷詩人であったが、ピンダロスは僭主たちに金で雇われていたわけでも、囚われの身であったわけでもない。ピンダロスは既に詩人としての地位を確立して裕福になっており、自由な身分であったからである。このような態度はシモニデスなど同時代の他の詩人には見られず、ピンダロスは特権的な立場にあった。

ギリシア世界において祝祭競技における勝利は、競技者本人にとっても、一族にとっても、ポリスにとっても最大の荣誉であり、勝利の祝勝歌は勝者にとって最大の褒賞であった⁽⁵⁴⁾。ピンダロスは、競技祝勝歌において、競技者の血統の良さ、神の助け、競技者を輩出したポリス、その統治者に降り注ぐ神の恩寵について礼賛をおこなっており、その作品は競技者、ポリス、統治者の荣誉を讃える叙事詩の形態をとるものであった⁽⁵⁵⁾。

しかしながら、選手たちは必ずしも貴族や裕福な市民ではなかった。ピンダロスが現れる以前には、たとえば紀元前 6 世紀の詩人クセノファネスのように、自身も貴族階級出身であったことから、競技の勝者たちが獲得した特権を認めようとせず、貴族の特権をあくまでも世襲的であり、なおかつ生得的なものであると強弁する者もいた。また、古代ギリシアの祝祭競技に参加できたのは、ギリシア世界において「市民」の地位を付与された男子だけであり、女性や奴隷は競技から排除されていた。けれども貧しい者たちが権力を握ることを恐れたアルキビアデスの時代以外、実際には出場に関して出自の貴賤を問われることはほとんどなかった⁽⁵⁶⁾。古代ギリシアの世界は、奴隷、一般の市民、裕福な市民、貴族と、非常に階層化された社会であったが、祝祭競技に関しては、例外的に誰もが平等な立場で出場することが許されており、なおかつスポーツの世界で成功することは、階級の上昇を果たして——現代と同じように——政界に躍り出る大きなチャンスでもあった。

ピンダロスは、競技の勝者について、彼らは神々の子孫であり、「生まれながらの貴族である」としていた。なぜならば、彼らの特徴づける卓越した身体的能力は、努力や鍛錬によって得られるものではなく、生得的なものであり、英雄性と切り離せないものであったからである⁽⁵⁷⁾。ピンダロスによれば、アキレウスやイーアースのような英雄が生まれながらに徳（アレテー）を備えた特別な軍人であるのと同様に、競技の勝者の示す特異な身体能力もこうした徳の一種であり、英雄性を示すものなのである。

また、この祝祭競技のスペクタクルにおいて注目すべき点は、祝祭競技においては、詩人も競技者と同じ特権的なステイタスをもつ存在と見なされていたことである。ピンダロスは

「人間の偉業はすべて神々の業によるものである。神々はわれわれに、詩を書く文才、競技に勝つ力、ことばの力を与え給うた⁽⁵⁸⁾」と述べ、詩人と競技における勝者については双方いずれもが神々からの恩寵を得て、生得の才能に恵まれた英雄であるとしていた⁽⁵⁹⁾。

ピンダロスはこのように、競技者をホメロスが描く英雄と同一視する一方、詩人は競技祝勝歌を書くことで競技の栄誉を永遠にとどめるため、崇敬の対象となるべきであると繰り返し言及している⁽⁶⁰⁾。ピンダロスは祝勝競技とスペクタクルにおける詩人の役割について、オリュンピア祝勝歌の「第一歌」の最終部で「今は亡き人たちの名声は、演説家と詩人が、故人が如何に生きたかを伝えることによってのみ明らかにされる⁽⁶¹⁾。」と述べているが、祝祭競技においては、競技そのものだけではなく、競技の優勝者を讃える「ことば」が必要とされたわけである。

一般に、祝祭競技に際して、競技祝勝歌は祝祭で吟じられると同時に大理石の碑に刻まれるならわしであった。ギリシア世界においては功績を大理石に金色の文字によって刻むことが、ポリスの栄誉を永遠のものにすると考えられていたからである⁽⁶²⁾。競技祝勝歌においては、競技自体の勝敗によって各ポリスの僭主がその権勢や威信をその場で競い合うだけでなく、競技における功績を「文学」によって書き残し、スペクタクルを開催することでナショナリズムの高揚がはかられていたのである。さらに大理石に刻まれた碑文はパピルスに、またその後は羊皮紙に転写され、現在にまで伝わることになった⁽⁶³⁾。このように競技祝勝歌は、当時のギリシア世界において、各ポリスの名声を歌によって広めると同時に、書きことばによって、その名声の永続性を確保するという役割をも果たしていた⁽⁶⁴⁾。この点についてピンダロスは、たとえば『オリュンピア競技』の第2編において、以下のように自らの文体の力がアキレウスの偉功に匹敵するものであると論じている。

難攻不落の敵であったトロイのヘクトールを倒したアキレウスは、まったく怯みもせずキュクノスとエオスの息子のエチオピア人も死に追いやった。私はえびらの中に、速度があり、なおかつ豊穡な文体の矢を抱えていた。こうした文体は優れた精神をもつものだけが所有を許されるものである。群衆たちはそこにたどりつくのに通訳を必要とする。秀でた人間は生まれつき能力を備えている。その能力を学びによって身に付けようとする人間は、ゼウスの聖なる鳥の前で、際限なくただカァカァと駄弁を続けるカラスのような存在に過ぎない⁽⁶⁵⁾。

ピンダロスによれば、アキレウスのような卓越した身体的能力は努力によって身に付くものではなく、生得的な才能であるが、それと同じように、競技者の圧倒的な才能について語る言説の力もまた、限られた詩人にのみ与えられた能力なのである。

ピンダロスの名声は、その後もギリシア世界にとどろき、紀元前2世紀頃にはアレクサンドリアにおいて、ビザンチウスのアリストファネスによって全17巻の巻物にまとめられた。

このうち4巻をなす競技祝勝歌（エピニーキア）は今日まで完全な形で残っているが、このようにピンダロスの大量の作品の中で競技祝勝歌のみが現存しているのは、祝勝歌四部作が紀元2世紀に綴じ本としてまとめられ、その後も教育の場で詩作の模範として用いられていたからであった⁽⁶⁶⁾。ピンダロスは、シモニデスが創出した合唱抒情詩というジャンルのスペクタクルを完成させ、その黄金時代を築いた詩人としてその名を広く知られているが、競技祝勝歌45編が完全な形で残っているほかは、ほとんどの作品が消失している。エピニーキアが、ピンダロスの作品のうち必ずしももっとも芸術的に優れたものではないとされているにもかかわらず、ほとんど欠損のない形で残されているのは、ビザンチン世界でのギリシア語による詩作に関する教育において、ピンダロスのエピニーキアはすぐれて有益であるとされていたからである⁽⁶⁷⁾。エピニーキアは祝祭競技という特殊な場における称賛という特殊な形式をもっていたが、詩の形式は極めて自由であった。ピンダロスの時代には厳格な規則にのっとって作られた詩は既に時代遅れと見なされており、実際、ピンダロスのエピニーキアも、四つの競技の祝勝歌がそれぞれ異なる形式で書かれている⁽⁶⁸⁾。

競技祝勝歌とシチリアの僭主

僭主ゲロンの庇護を受けてシラクーサの宮廷詩人となったピンダロスは、ゲロンと後継者の弟、ヒエロンによる数々の功績を競技祝勝歌に描いた。ピンダロスの競技祝勝歌の歌集は、競技ごとにまとめられているが、それぞれの祝勝歌は、競技のおこなわれた年ごとに時系列に配置されているわけではなく、ピンダロスの作品を編纂したアレクサンドリアの学者、アリストパネスにより、重要な歌から重要でない歌へとという順序で配置されている⁽⁶⁹⁾。オリュンピア競技とピュティア競技を讃える祝勝歌の歌集の場合、シラクーサのヒエロンに対する称賛がそれぞれ冒頭に置かれているが、このことはピンダロスの『オリュンピア祝勝歌』と『ピュティア祝勝歌』において、それぞれヒエロンがもっとも重要な存在であることを示している。しかしピンダロスの競技祝勝歌において、運動競技そのものが占める割合は驚くほどわずかであり、その主たる内容はポリスの僭主に対する称賛である。

ピンダロスはたとえば『オリュンピア祝勝歌』の冒頭、「騎馬競走の勝者、シラクーサのヒエロンについて」と題された最初の章において、以下のようにヒエロンに呼びかけ、称賛を捧げている。

ヒエロン、神は貴下の命運を見守っている。神が貴下への寵愛を止めず、貴下の駿足の戦車がもたらす勝利がより甘美なものとなることを私は望んでいる。私はクロノスの輝く丘のそばに、勝利を祝い称える人々の列が道となるのを見に行くだろう。そう、ムーサイ（ミューズ）は何にも勝る圧倒的な詩作の力を私にとどめておいてくれる。偉大さにはいくつかの階層がある。もっとも崇高な偉大さは王たちのために立ち現れる。勝者

たちとともに、貴下の足がつねに頂きを踏みしだき続けるよう祈ろう。貴下が偉大さの頂点にある限り、私はギリシア人の間でいずこの土地においても自分の天才を知らしめることになるだろう⁽⁷⁰⁾。

ここでピンダロスは、ヒエロンが神に「王」として選ばれた存在であり、「王」としての資格を十分に備えていることを立証している。まず、ヒエロンがオリュンピア競技の中でも一番権威があると考えられていた戦車競走で勝利を収めるとすれば、それは何よりもヒエロンに対する神の寵愛によるものである。さらに、ヒエロンの「王」としての卓越性は、詩作の神であるムーサイがピンダロスに与える超越的な力として顕現する。ピンダロスによれば、詩には複数のレベルの「偉大さ」があり、詩に最上級の「偉大さ」である「崇高な偉大さ」が現れるのは、「王」の特権である。このため、詩人ピンダロスがヒエロンを讃える詩において、詩作の神、ムーサイが偉大な崇高さを現出させるとすれば、それはヒエロンが神々から選ばれた「王」である証しなのである。

一方、『ピュティア祝勝歌』の冒頭の歌は、「エトナのヒエロンのために——戦車競走優勝」と題されており、僭主ヒエロンの紀元前470年における戦車競技における勝利と、シラクサの住人を移住させて造った新しいポリス、エトナの建設を讃えている⁽⁷¹⁾。ここでピンダロスは、ヒエロンの治世の栄華と権勢が、エトナの支配者となる、彼の息子デイノメネスにも継承されるようにという内容の祈りを高らかに歌い上げている。

フェニキアとテュルセアの民たちは、シラクサの王が彼らの攻撃を鎮圧したときに受けた苦痛を忘れてはいない。シラクサの王は素早く進む船団から、二つの民の若人を海に突き落とし、ギリシアを深い隷属から解放した。(中略)しかし澄んだ水をたたえるヒメラの岸辺では、デイノメネスの子孫たちに頌歌を捧げよう。子孫たちは、敵にあればどの苦難を与えたのだから、その武勲はこの頌歌をもって讃える価値がある⁽⁷²⁾。

当時のギリシア世界においては、ギリシア人が優れた統治形態の下で「自由」を享受しているのに対して、アジア人たちは「隷属」を余儀なくされていると考えられていた。ピンダロスは上の詩句において、ヒエロンがギリシアをアジアの国々から守り、隷属的な支配から解放し、「自由」を賦与した王であるとして讃えている。さらに、ピンダロスは、デイノメネスとその子孫たちが、アジアの国々からの攻撃に対して勇敢に戦ったことを想起し、ギリシアの神々は彼らに恩寵を授けるべきだと歌っている。

さらに同じ『ピュティア祝勝歌』第一歌、「エトナのヒエロンのために」において、ピンダロスは、残虐な僭主として知られるファラリスを批判した上で、ヒエロンが祝祭競技での勝利とムーサイによる喝采を受けたことを根拠として、ヒエロンがファラリスとは異なり、正当な権力を担う支配者であることを述べている⁽⁷³⁾。

しかし、人々を青銅の牡牛に入れて焼いたファラリスには血も涙も無い。そして至るところに憎しみの記憶をとどめている。そのため館の中で少年たちの声が豎琴の響きを借りながらその名を唱えることは決してない⁽⁷⁴⁾。

競技祝勝歌というジャンルは、しかし創始者のシモニデスとほぼ同時代人であったピンダロスとバッキュリデスの時代に最盛期を迎えた後、急速に衰微し、その後ほとんど見られなくなる。このことは、祝勝歌と僭主制度が深く結びついていたことを如実に示している。祝勝歌を求めた僭主たちが倒れた後、彼らを「正統な君主」として讃えるために作られた歌もまた必要とされなくなったのである⁽⁷⁵⁾。そして祝勝競技や競技者に対する熱狂は、ギリシア時代の終焉とともに失われることになった⁽⁷⁶⁾。

現代と同様、古代ギリシアにおいても、戦争、貧困、税金、政治といった問題はつねに論争を引き起こしていたが、その反面、スポーツが紛争の原因となることはなかった。オリュンピア競技に関する、プラトンやアリストテレス、キケロによる議論の影響は最小限にとどまっており、具体的に論争というものを引き起こすものではなかったのである。ところが、オリュンピア競技がローマ帝国において、紀元 393 年を最後に廃止されたのは、キリスト教がローマ帝国の中で勢力を強めていったためである。キリスト教の教父たちはオリュンピア競技が異教の神々に対する崇拝に基づいた競技会であるという点について、批判を嵩じさせていったことが、オリュンピア競技廃止の直接の原因となった⁽⁷⁷⁾。

III. レトリックの誕生と発展

シラクサでは紀元前 465 年に僭主トラスボユロスが追放されたことをきっかけに、民衆たちが政治を担い、民主制が始まった。ところが、ヒッポクラテスからトラスボユロスまで、代々の僭主は数十年にわたって、ガモロスと呼ばれた土地貴族から農地を接収し、土地所有権を独占していた。このため僭主による支配が終わった時点において農地の所有権は非常に不明瞭なものとなっており、民主政が始まると同時に、民衆の間で「土地所有権」に関する無数の訴訟がおこなわれるようになった⁽⁷⁸⁾。こうした訴訟は市民法廷が請け負うことになったが、僭主による土地や私有財産の専有が長期にわたっており、過去の土地所有権の証拠となる資料もほとんど存在しなかったことから、所有関係を主張するための正当な論拠を見つけるのは至難の業であった。長い間、僭主たちに支配されていたことから、民衆たちは法廷弁論について全く無知であったが、当時は現在の弁護士役割を果たす専門家がおらず、陪審員制の市民法廷で本人が弁舌を振るう必要があった。

とはいえ、民衆たちは市民法廷において何をどう論じればよいのかわからず、大変な苦勞を強いられたため、まず法廷弁論の執筆を代筆修辭家 (logograph) に依頼するようになった。

代筆修辞家は、いわば法廷弁論のゴーストライターで、訴えを起こす民衆は、代筆修辞家があらかじめ執筆した弁論をそのまま代読していたわけである。しかし法廷で訴えを起こす民衆、そして弁論の執筆を請け負う代筆修辞家たちは、法廷弁論をさらに高度なものとするために、弁論の代筆よりもさらに効果的な方法を要請することになる。その結果、シラクサーでは、弁論の代筆ではなく、訴訟における弁論の技術そのものを向上させ、その技術を伝授することが求められるようになった。

シチリアで最初に弁論の技術に関する規則をまとめたのは、プラトンやアリストテレスが「弁論術の祖」とするピタゴラス派の哲学者、エンペドクレスとされている⁽⁷⁹⁾。エンペドクレスは紀元前5世紀にシチリアのアクラガスにおいて活躍した当時最大の自然学者であった。エンペドクレスが書いたとされる『自然学』に関する教本は現存しておらず、その内容もほとんど残されていないものの、エンペドクレスの自然学は、宇宙は「火、空気、水、土」という四つの要素によって構成されており、これらの要素が「愛」と「憎しみ」という原理によって離合集散しながら変化を続けるとしている。

一方、弁論の技術に関する最初の書物である『技術（テクネー）』を世に出したのは、エンペドクレスの弟子のコラクスとされている。コラクスはシラクサーの僭主ヒエロンから庇護を受けていたことでも知られているが、コラクスと、その弟子のティシアスは、シチリアにおいて弁論家として、また彼らの優れた法廷弁論の技術を教授する教師として、プラトンが『パイドロス』において言及するように、大変な人気を博することになった⁽⁸⁰⁾。しかしコラクスが紀元前460年頃に執筆したとされる『テクネー』は、当時のシチリアにおいて法廷弁論の技術について書かれた断片を集約したものに過ぎず、専門的に体系化された書物であった可能性については現在では疑問視されている。とはいえ『テクネー』は当時、若い市民たちの間で広く読まれていた。

コラクスが作成した『テクネー』は、「序論」、「戦い」、「結び」という三部構成による法廷弁論の作成テクニックであったが、ここには既に後の弁論術において発展する「配置」、すなわち全体の構成についての考察が現れている⁽⁸¹⁾。『テクネー』において、コラクスが「戦い」と名付けた本論は、(1)「叙述、または、行為（事実の報告）」、(2)「議論、または、立証」、(3)「余談」という順序で構成されており、弁論は「序論」、「陳述」、「証拠」、「証明」、「蓋然性」、「保証」、「反駁」という順序でおこなわれていた⁽⁸²⁾。まず「序論」と「陳述」において「生起した事実」を述べ、さらに「証拠」においては証拠文書の提出や、証人による論述がおこなわれた。「証明」においては自分の主張の正当性を主張する弁論がなされ、「蓋然性」においてはプラトンが『パイドロス』において引用しているように、「どうして、ご覧のようなこの私が、このような男に手出しをすることができるでしょうか」というような形で一般的な蓋然性、「真実らしさ」が主張されることになった。また「保証」においては弁論人が誓いのことばを述べ、人格・財産などを提示することによって「蓋然性」を高めるという手続きがとられた。さらに「反駁」においては相手側の発言に対して、反論をおこなうこと

になっていた。コラクスの『テクネー』の内容は、「土地所有権」を奪い返す、もしくは奪い取るためには全く手段を選ばないというマキャベリ的な理念に基づくものであった。

けれども、このような経緯を経てシチリアで発展した法廷弁論の教授法は、その後たちまちギリシア本土のポリス、とりわけアテネに伝わることになる。紀元前5世紀においてギリシアはペルシアとの戦争に勝ち、それを契機に躍進を遂げていた。中でもアテネは、ペルシア戦争において中心的役割を果たしたことから、ギリシア本土においても覇権を掌握していくようになった。当時のアテネは、ペリクレスが直接民主制のもとで展開した平和政策のもと、軍事、経済、文化において最盛期を迎えていた。この直接民主制の社会においては口頭弁論の技術が何より必要とされたため、シチリアで発展した弁論の技術と教授法はアテネにおいてさらなる発展を遂げるようになった⁽⁸³⁾。

二つの躓きの石——シチリア僭主政の影

紀元前5世紀のシチリアにおいて書物として体系化された弁論の技術は、その内容においても、伝授の方法においても、シチリアの僭主政を彷彿とさせる、野蛮で暴力性を孕んだものであった。実際のところ、弁論術が受容される過程においては、シチリアの僭主たちの亡霊が二つの躓きの石となって顕在化する。一つ目の課題は、「弁論の技術」は必ずしも正しい内容の主張に用いられるものではないという点である。現在でもレトリックという語は、内容をともなわない空疎な言論という意味で用いられることが多く、不当にネガティブな意味合いを負わされた用語であるが、シチリアの市民法廷における弁論の目的は、土地所有権の奪取という欲得がらみの訴訟における勝利であり、勝つためには詭弁を弄し、真実をねじまげ、強弁によって説き伏せることも辞さないというものであった。そのため、この民主制のシチリアにおける揺籃期のレトリックには、紀元前6世紀から紀元前5世紀にかけて跋扈した僭主が殊更に隠蔽しようとしていた暴力性が明白な形で現れることになる。コラクスやティシアスが理論化した弁論術は、倫理的な配慮はもたず、ことばに暴力的な力を付与して強欲な論理を押し通すことを目的としていたからである。

古代シチリアにおいて成立したレトリックは、もともと所有権が明確でない土地について、その所有権をめぐる論争に勝つための技術であった。そのため供述の内容の真偽は問題とはならず、成立当時からレトリックはどんな手段を用いても相手を説き伏せることを目的としており、「人をだます技術」として広まっていた。これはそもそも「証拠がない土地所有権」をめぐる法廷弁論の内容は、必ずしも真実である必要がなかったからである。このため弁論術は、真実ではないことを巧みな言い回しで説き伏せる術とされ、価値を貶められていた。後に述べるように、たとえ語られる内容が真実でなくても、他人を論駁することを可能にする「悪の説得術」として批判を受けていたわけである。

こうしたレトリック批判は、アテネでシチリア発祥の法廷弁論の技術を発展させたレト

リック教師、アンティポン（前 481 ～前 411 年）の弁論術にもよく現れている。アンティポンが目指したのは、「誰にでも法廷で自己の利益を弁護できる」ための「紋切り型」を伝授することであった。アンティポンは、「トポス」と呼ばれる「暗記するだけで多様な訴訟に使用できる類型的な論法」を起草し、さらにエイコスと呼ばれる蓋然的真実の理論を練り上げていった⁽⁸⁴⁾。

なお現代においてもレトリックとその学問体系に対する懐疑的な態度は脈々と生き続けている。ルブールが『レトリック』の冒頭で指摘しているように、「レトリック」という語自体だけではなく、現在、日常語として用いられているレトリックの技術的用語は多くの場合、軽蔑的な意味で用いられている。たとえば、もともと「より巧みに説得をするために弁論家が聴衆の情念、欲望、感情をかき立てる作用」である「パトス (pathos)」は「不自然な悲壮感」、アンティポンが生み出した「トポス (lieu commun)」の概念は、「陳腐な決まり文句」という意味に貶められてしまっている⁽⁸⁵⁾。つまり、レトリックは「巧みなことばで人をだます技術」というスティグマを負い、誤解を受けることの多い技術であるため、レトリックについて論じる場合には、まず「いかがわしい技術」という偏見を払拭する必要があるのである。

シチリアで生まれたレトリックが負う二つ目の躓きの石は、レトリックが金銭の授受を媒介としていたことである。古代シチリアにおいて成立し、広く使用されるようになったレトリックは、土地所有権という財産を目的として習得された。さらに、土地所有権の訴訟のための弁論の技術は金銭で取引されるものであった。このことから、レトリックは金銭を目的として、また、金銭によって授受される下賤な技術と見なされるようになったのである。

アテネにおいて職業人としての地位を確立した法廷弁論の教師たちは、前 450 年頃に有名になったアブデーラのプロタゴラスが「賢人」という意の「ソフィスト」を名乗って以来、一般にこの名で呼ばれるようになった。紀元前 5 世紀の半ばにはヘロドトスが『歴史』において「ソフィスト」という語を用いていたことが知られているが、これはギリシアの知識人たち、特にペルシアに赴いた、あるいはトルコから任務を終えて帰国した者たちを指す語であった⁽⁸⁶⁾。つまり、ソフィストとは、ギリシアが征服した国々において教育を施行するために派遣された知識人たちのことであったのである。

このように古代ギリシアにおいて「ソフィスト」とは、特定の職業や社会的カテゴリーを指すものではなく、現在、ソフィストという語がもつような倫理的にネガティブな意味合いも付されていなかった。実際、ギリシア語の「ソフィステー」という語はソフィア（知識、知恵）やソフォス（知識人、知者）といった語と同じ語源をもつもの、つまり「知る人」という意味である。ただ、ソフィステーという語は紀元前 6 世紀頃、ピンダロスやアイスキュロスの著作の中で使われるようになったものの、一般にはソフォスという語が、それ以前から、より頻繁に用いられていた。ソフォスもまた、知識をもつもの、知識人という意味で用いられていたが、ソフォスは、学問や思想を主要な活動、すなわち職業とする者のことであった。それに対して、ソフィステーという語は、ソフォスのように賢人という意味ではなく、「達

者」，「巧妙さ」という，もっと限定された意味で用いられていた。つまり，ソフィステーとは単に知識のある人間ではなく，それを使う特殊な技術をもった人間とされていたのである。このソフィステーは，「狡猾」「腹黒い」というコノテーションをもち，そう呼ばれる者は知識を悪用することもあると見なされていた⁽⁸⁷⁾。

ソフィストは，クセノフォンやプラトンの著作に描かれているように，様々な分野における教育に従事する者たちであった。またソフィストの活動は，趣味的なものではなく，生活の糧を得るためのものであった。ソフィストは，その当時，いくつかの面で新しい存在であった。まず，学校というものが存在しなかった時代に「教育」が家庭からアウトソーシングされて，謝金と引き換えにおこなわれるようになったことが挙げられる。

しかし「人をだます技術」，「金で買える技術」という二つの躓きの石については，とりわけプラトンがその著作において厳しく批判したことから，その後もレトリックに関する議論の中核をなすことになる。とはいえ，レトリックのこれらの「短所」はまた，レトリックが「誰にでも用いることができる」というものを目指したという点と表裏一体であったことは特筆に値する。弁論の技術は講師料によって誰にでも手に入るものとなり，弁論を学ぼうという「買い手」の知性や家柄が不問に付されると同時に，資金をつぎこむことによって誰しもが「技術」を手に入れることができるようになったのである。

ソフィストが伝授するとされた弁論の技術は，哲学的にはあくまでも相対主義の立場を目指すものであり，なおかつ政治的な成功を何より求めるものであったが，古代ギリシアにおいてソフィストの技術を批判的な形で伝承し，最終的に弁論術を哲学的なものへと昇華させていったのはプラトン，そしてアリストテレスであった⁽⁸⁸⁾。プラトンは『ゴルギアス』において，弁論術について論じる際に，「体育」と「化粧法」のアナロジーを使用して，弁論術を「体育」よりは「化粧法」に近いものであるとしている。身体に真の善をもたらす「体育」と比べ，「化粧法」は単に表面を糊塗する「迎合」の技術に過ぎないと言うのである。

しかし，プラトンは『パイドロス』においては，ソクラテスに弁論術の有用性を語らせ，『国家』においては文芸の教育の方法と重要性を記したことで，レトリック（修辞学）は自由7科の一つとしてリベラル・アーツに欠かせないものとされることになった。さらにプラトンは『国家』においては詩と音楽の教育を重視していることから，修辞学はその延長と見なされているのではないだろうか。つまり，シチリアの僭主のもとで発展した祝勝歌は，韻文で書かれているとはいえ僭主に対する明らかな「称賛演説」であり，これがレトリックの伝統を準備したことは否めない。レトリックは一般に，シラクサーで僭主が追放されて，民主制が成立したことを契機に生まれたと考えられてきたが，実際に，その後のレトリックを発展させる基盤は，祝勝歌などの詩文の中に既に宿り，懐胎していたといえるだろう。無論，ピンドロスにおいても，プラトンにおいても，詩作においては，詩作の神であるムーサイの力が不可欠であったわけで，シチリアの市民法廷で生み出された「野蛮な」弁論術と，神々が降臨するかのごとく現れる詩才のインスピレーションとは一見接点をもたない。しかし，プ

ラトンが弁論術にレトリケという名称を授け、これを時に擁護したとすれば、それはプラトンが韻文だけではなく、散文の生成過程においても場合によっては「超越的なもの」が立ち現れること、散文の構想もまたムーサイの神の業のような人智を超えた作用と無縁ではないことを認めたからであろう。

むすびにかえて

20世紀後半のフランスにおいて、主に文学理論の範疇の中で発展したレトリック論は、古代シチリアにおける弁論の技術が生まれた契機を、紀元前5世紀の民主制の成立ととらえてきた。しかしながら、シチリアの都市国家における民主制の成立は、アテネなどギリシア世界の中心部に位置するポリスよりも時代的に後のことであり、シチリアのポリスにおける「自由の開花」に弁論の技術の起源を求めるのは、いささかご都合主義的な見方だろう。本稿はこのような観点から、古代シチリアの歴史、特に、南シチリアにおいて僭主たちが跋扈し、ギリシア世界において経済的、そして軍事的な覇権を築き上げる過程を検討した。その結果として、シチリアの僭主たちが、オリュンピア競技など、宗教的な祝祭競技と勝利を讃える勝利祝祭歌を自らの正当性を確立するための本質的な要素として重視していたことがわかった。たとえばレトリック発祥の地であるシラクーサを支配していた僭主、ヒエロンは、自らの統治を正当化し、その統治を神々が庇護していることを証し立てるために、オリュンピア競技をはじめとする祝祭競技に選手を送り込み、当時のギリシア文化圏における最高の詩人とされたピンダロスに数々の頌歌を書かせていた。これは競技における勝利と詩人を鼓舞する詩才の力こそが神々の庇護を証明すると考えられていたためである。

本稿ではこれまで、シラクーサがレトリック発祥の地となったのはなぜか？ という問いを展開する形で、考察を進めてきたが、シチリアのポリスにおいてレトリックが成立した背景には、僭主制時代に構築された競技祝祭歌をはじめとする、韻文と音楽を基盤とする詩の文化が大きな役割を果たしている。特に、後のレトリックの分類において「称賛演説」というジャンルとなる部分について、祝祭歌は確固とした基盤を形成していたといえる。このように、古代シチリアのポリスは、僭主制時代に蓄積した文化的資本によって、民主制の成立と同時にレトリックを新たな文化として生み出すことができたのであろう。

注

- (1) David M. Timmerman and Edward Shiappa, *Classical Greek Rhetorical Theory and the Disciplining of Discourse* (Cambridge: Cambridge University Press, 2010) pp. 8–10.

- (2) 野内良三『レトリックのすすめ』（大修館書店，2007年）3頁参照。ヨーロッパにおいてはルネサンス期における活版印刷の発明以来，口頭弁論の存在感が小さくなり，レトリックは「書く技術」を指す語となった。以来，「話す技術」すなわち口頭弁論の方法について「雄弁術（eloquence/éloquence）」という語が用いられるようになり，書きことばに関する方法論が「レトリック（rhetoric/rhétorique）」と称されるようになった。
- (3) Roland Barthes, «L'ancienne rhétorique-aide-mémoire (1970)» dans *Œuvres complètes* (Paris: Seuil, 2002) III, p. 531（邦訳：ロラン・バルト『旧レトリック』沢崎浩平訳（みすず書房，2005年）15頁）。
- (4) Olivier Reboul, *La Rhétorique* («Que sais-je? », Paris: Presses Universitaires de France, 1998)（邦訳：オリヴィエ・ルブール『レトリック』佐野泰雄訳（白水社文庫クセジュ，2000年）12頁）；Olivier Reboul, *Introduction à la rhétorique* («Premier cycle», Paris: Presses Universitaires de France, 1991). 後者に関しては，1994年に増補改訂版が刊行された後，2011年には文庫化され，さらに2013年に重版が出ており，Olivier Reboulの死後も読み継がれるロングセラーとなっている。
- (5) Antelme-Édouard Chaignet, *La Rhétorique et son histoire* (Paris: Wieveg, 1888) pp. 1-2.
- (6) シチリアの歴史については以下の文献を参考にした：Jean Huré, *Histoire de la Sicile* («Que sais-je? », Paris: Presses Universitaires de France, 1957)（邦訳：ジャン・ユレ『シチリアの歴史』幸田礼雅訳（白水社文庫クセジュ，2013年））；Moses I. Finley, *La Sicile antique: Des origines à l'époque byzantine*, trad. Jeannie Carlier («Collection Deucalion», Paris: Éditions Macula, 1986)；Victor Bérard, *La colonisation grecque de l'Italie méridionale et de la Sicile dans l'Antiquité. L'histoire et la légende* (Paris: Presses Universitaires de France, 1986)；Georges Vallet, *Le monde grec colonial d'Italie du Sud et de Sicile* (Roma: École française de Rome; Paris: Diffusion de Boccard, 1996).
- (7) ジャン・ユレ，前掲書，8頁。
- (8) Finley, *op.cit.*, pp. 28-29.
- (9) *Ibid.*, p. 29.
- (10) この点については，漫画家のヤマザキマリ氏にご教示を受けた。ヤマザキ氏は古代ギリシアの壺絵師見習いの青年を主人公とした漫画『オリンピア・キュクロス』を刊行，連載を続けている。
- (11) *Ibid.*, pp. 44-46.
- (12) *Ibid.*, pp. 47-51.
- (13) *Ibid.*, pp. 41-44.
- (14) *Ibid.*, pp. 44-46.
- (15) *Ibid.*, pp. 33-50；Diodorus Siculus, *Library of History*, ed. Russel M. Geer (Boston: Harvard University Press, 1939, 1993) V. 9, pp. 122-123. デイオドロスはシチリアの近くのリパラ島における土地分配について，20年おきにくじびきで配分をおこなうシステムなどについて書いているが，これについては多くの歴史家がギリシア世界ではありえないことであったと言及しており，シチリアにおいてもアテネや他のギリシアの都市国家と同様な貴族たちによる土地の独占がおこなわれていたという見方が有力である。
- (16) アリストテレス『政治学』牛田徳子訳（京都大学出版会，2004年）4巻，2章，1240a，182頁。
- (17) 同書，4巻，10章，1295a，208頁。
- (18) Finley, *op.cit.*, pp. 58-59；ジャン・ユレ，前掲書，35頁。この「青銅の雄牛」はその後もキリスト教世界において処刑装置として頻繁に用いられたほか，ダンテの『神曲』地獄篇にも「シチリアの雄牛」として登場する。
- (19) Finley, *op.cit.*, pp. 58-59.

- (20) *Ibid.*, pp. 41–43.
- (21) *Id.*
- (22) *Id.*; Vallet, *op.cit.*, pp. 150–151.
- (23) *Ibid.*, pp. 62–63; Vallet, *op.cit.*, p. 149.
- (24) Hérodote, *Histoires*, éd. Ph. E. Legrand (Paris: Les Belles Lettres, 1951, 1986) VII, pp. 153–165.
- (25) Finley, *op.cit.*, pp. 62–67.
- (26) *Id.*
- (27) *Id.*
- (28) *Id.*; Hérodote, *op.cit.*, VII, pp. 156–162.
- (29) Finley, *op.cit.*, pp. 66–67.
- (30) Hérodote, *op.cit.*, VII, pp. 165–166.
- (31) Diodorus Siculus, *op.cit.*, XI, 24, p. 187. 編者はシチリアのディオドロスの記述について、注において、ディオドロスは母国シチリアの歴史的栄光についていささか尾ひれをつけ過ぎる傾向があると述べている。
- (32) Hérodote, *op.cit.*, VII, pp. 157–160.
- (33) ジャン・ユレ, 前掲書, 64–65 頁。
- (34) 同書, 40 頁。
- (35) Finley, *op.cit.*, p. 67; Vallet, *op.cit.*, p. 154; Diodorus Siculus, *op.cit.*, XI, 49, p. 253 ; 内田次信「解説」『ピンドロス祝勝歌集 / 断片選』（京都大学出版会, 2001 年）110 頁。
- (36) Finley, *op.cit.*, p. 67.
- (37) ジャン・ユレ, 前掲書, 65–66 頁。
- (38) Finley, *op.cit.*, p. 67.
- (39) アリストテレス, 前掲書, 5 巻, 11 章, 1315b, 300 頁。
- (40) *Ibid.*, p. 68.
- (41) *Ibid.*, pp. 68–69.
- (42) Gauthier Liberman «Introduction» dans *Pythiques* de Pindare (Paris: Éditions Calepinus, 2004) p. 8.
- (43) Liberman, *op.cit.*, p. 9.
- (44) Moses I. Finley, H.W. Pleket, *1000ans de jeux Olympiques, 776 av. J.-C./261 ap. J.-C.*, trad. par Cécile Deniard (Paris: Perrin, 2004), pp. 44–45.
- (45) *Ibid.*, pp. 78–80.
- (46) *Ibid.*, p. 18.
- (47) ペルシア戦争においてギリシアがペルシア艦隊を破ったサラミスの海戦と、ゲロンが一日でカルタゴ軍を駆逐したとされるヒメラの戦いは同じ日に開戦された。ところが、ギリシア対ペルシア、シチリア対カルタゴという歴史的決戦がおこなわれていたこの日もオリュンピア競技は他の年と全く同じように開催されていた。この年、オリュンピア競技において戦車競走で勝利を挙げたのは、南イタリアのポリリス、レッジョの僭主アナクシラスであった。アナクシラスのレッジョは、しかし、ヒメラの戦いにおいて、当時地中海最強の軍を率いていたシラクサに背き、カルタゴと結託したことで、敗戦の痛手を喫した。つまり、オリュンピア競技では勝利を獲得したものの、シチリア対カルタゴの決戦においては、戦局を見誤って苦杯を喫することになった。
- (48) *Ibid.*; Finley, Pleket, *op.cit.*, pp. 17–18; Pindare, *Odes triomphales: Olympiques. Pythiques. Isthmiques. Néméennes*, trad. M. Sommer, Nouvelle éd. revue, (Paris: Éd. Paleo, 2008), p. 5.

- (49) Liberman, *op.cit.*, p. 9.
- (50) *Ibid.*, pp. 50-77.
- (51) *Ibid.*, p. 63.
- (52) *Ibid.*, p. 86.
- (53) 内田次信, 前掲書, 429 頁。
- (54) Liberman, *op.cit.*, p. 10.
- (55) *Ibid.*, p. 13.
- (56) Finley, Pleket, *op.cit.*, p. 90
- (57) *Ibid.*, pp. 183-184.
- (58) *Ibid.*, p. 30.
- (59) *Ibid.*, p. 9.
- (60) *Ibid.*, p. 11.
- (61) Pindare, «Première Pythique» in *Pythique*, éd. Aimé Puech (Paris: Les Belles Lettres, 2014) p. 34. 以下の
ピンダロスの詩句の訳については『祝勝歌集 / 断片選』内田次信訳を参考にした。
- (62) Liberman, *op.cit.*, p. 9.
- (63) *Ibid.*, p. 12.
- (64) *Id.*
- (65) Pindare, *Olympiques*, *op.cit.*, p. 47.
- (66) *Ibid.*, pp. 7-8 ; 内田次信, 前掲書, 434-435 頁。
- (67) Liberman, *op.cit.*, p. 8 ; 内田次信, 前掲書, 435 頁。
- (68) *Ibid.*, p. 15.
- (69) *Ibid.*, p. 9.
- (70) Pindare, *Olympiques* (Paris: Les Belles Lettres, 1922) p. 32.
- (71) Liberman, *op.cit.*, p. 11. ピュティア競技は、パイソンという名の蛇がアポロンを破ったことを記念して、
パルナッス山の麓、デルフォイに位置する聖域ピュティアにおいて開催されていたが、当初から運動競技が主体であったオリュンピア競技とは異なり、紀元前 6 世紀までは音曲や舞踊のコンテストが主体であった。運動競技が開催されるようになったのは、紀元前 582 年とされているが、ピュティア競技における勝利もまたギリシア世界における最大の榮譽であり、競技での優勝は、ギリシア世界における、権勢と成功、そして神からの寵愛を示す手段であった。当時、運動競技の中でもっとも注目されていたのは、装備の準備や輸送に高額な資金を必要とした戦車競技であり、そこでの勝利は抜群のステイタスを約束するものであった。
- (72) Pindare, «Première Pythique», *op.cit.*, p. 32. エトナ建設については、アイスキュロスも劇作品を執筆した記録が残されており、この現存しないアイスキュロスの作品がピンダロスの『ピュティア祝勝歌』の第一章に大きな影響を与えたとされている。
- (73) *Ibid.*, p. 34 ; 内田次信, 前掲書, 429 頁。
- (74) Pindare, «Première Pythique», *op.cit.*, p. 34.
- (75) 内田次信, 前掲書, 443-445 頁。
- (76) Finley, Pleket, *op.cit.*, p. 176.
- (77) *Ibid.*, p. 177.
- (78) Cicéron, *Brutus*, XII, 46.
- (79) 納富信留, 『ソフィストとは誰か?』(人文書院, 2006 年) 128 頁。

- (80) Chaignet, *op.cit.*, p. 3. 菅野盾樹『レトリック論を学ぶ人たちのために』(世界思想社, 2007 年) 6-7 頁参照。プラトン『パイドロス』266D-267B, 136-138 頁, 273A-273B, 157-158 頁. D. A. G. Hinks, “Tisias and Corax and the Invention of Rhetoric” in *The Classical Quarterly*, 1940, 34, pp. 61-69.
- (81) オリヴィエ・ルブール, 前掲書, 12 頁。
- (82) ロラン・バルト, 前掲書, 16 頁。
- (83) 中澤務「解説」『プロタゴラス』(光文社古典新訳, 2010 年) 9 頁。
- (84) ルブール, 前掲書, 14 頁。
- (85) ルブール, 前掲書, 7-8 頁。
- (86) Hérodote, *Enquête*, I, 29, 3; II, 49, 6.
- (87) Platon, *Les Sophistes*, I, éd. Jean-François Pradeau («Flammarion Lettres», Garnier Flammarion, 2009) p. 19.
- (88) Edward Schiappa, *Protagoras and logos: a study in Greek philosophy and rhetoric* (Columbia: University of South Carolina Press, 1991) p. 39. 19 世紀から 20 世紀にかけての修辞学研究においては、レトリックという語はプラトンが使用する前から存在していたと見なされていたが、近年、エドワード・シアッパや納富信留が指摘するように、「弁論術 (rhetorike)」という語を最初に用いたのは、ディアレスティックやエリスティックなど弁論に関する多くの技術について「～術 (ike)」という命名をしたプラトンであった。語幹に置かれた「弁論の (rheto)」という表現も、プラトン以前にはほとんど見られないことから、「弁論術 (rhetorike)」という語はプラトンの発明と考えられている。

(2018 年 11 月 20 日 受理)